

遷都 50 周年ブラジリアの都市計画と建築

南條 洋雄

はじめに

学生時代、ブラジリアは私たち都市計画・建築を学ぶものにとって、ル・コルビジェの唱える理想都市の実現例という教材だった。当時すでに、コルビジェ教科書のお手本通りに造ったにもかかわらず、世紀の失敗作、参考としてはならぬ批判の対象として教えられていた。

私は 1975 年に初めて現地に行き、こうした悪評とは違う素晴らしいブラジリアの実態に驚いた。かつ 10 年間のブラジル滞在で社会経済の特殊性やブラジル人の生活観などが理解できるようになり、ブラジリアという都市をまったく別の見方で評価できるようになった。以来、間違った先入観でブラジリアバッシングする日本人に対して、ブラジリアを正しく理解してもらおうようにと、いろいろ書いたり、話したりしている。

ブラジリア遷都の歴史と意味

ブラジリアという都市は一国の新首都として建設されたわけであり、この都市を理解し評価するには、遷都論から入る必要がある。本年はブラジリア遷都 50 周年という節目にあたる。ブラジリアはなぜ誕生したか。クビチェック大統領がいきなり思いつきで作ったように日本では言われているが、実際はブラジルの長い歴史の結果なのである。

大航海時代、西暦 1500 年に西洋人がブラ

ジルを発見する。そして 1549 年にはポルトガルの総督府がサルバドールにつくられた。当時のブラジルの中心がサルバドール。言ってみれば最初の首都がサルバドールと言える。その後 1761 年マルケス・デ・ポンバウ、1792 年チラデンテス、こういった歴史上の人物が、すでに内陸部プラナウト高原にこの国の中心を移すのだと言う議論をしていたという記録がある。当時の場所は現在のブラジリアからはちょっと外れているが、この頃からずっと議論されている。そして時は過ぎ、スペインに追われたポルトガル政府が逃げて来て、リオネジャネイロにポルトガルの首都が移る。そして、帰国する時に皇太子ドン・ペドロがおいていかれて独立する。それが 1815 年。この間遷都というのは国民全体の関心事だったわけである。なぜかということそれまでの開発は沿岸部に限られていた。そこでこの国の繁栄はアマゾンを含めた奥地開発にあるという考え方から、沿岸部の全ての都市から概ね 1000km の地点を首都とするのがこの国の遠い将来のあるべき姿だと、数百年かけて議論してきたのだった。(写真 1)

ブラジリア建設

衝撃的だが(写真 2) がルシオ・コスタの自筆のコンペ図面である。今このレベルのコンペなら CG などを駆使したプレゼンテーションで競い合って、誰が一番良いのか決めるの

だが、この図面はコスタがアメリカから帰ってくる船の中でサクッとフリーハンドで書いた絵だそう。

2本の線で十字から始まり、展開され、そして最終図面となる。この子供のお絵描きみたいな図面、それに基づいて突貫工事が始まる。朝日が昇ると夕日が沈むのが両方地平線に見える。そんな大地にどんな都市をつくるのか。その答えを示したのが二本の線なのである。(写真3)

連邦区と衛星都市群

よく言われるのが「ブラジリアは住みにくい。だから、人は周辺にスラムを作り、そこで人間らしく住んでいる。」これはひどい事実誤認であり、衛星都市すべてがスラムではなく計画都市なのである。当時のヨーロッパのニュータウンを作る時の理論がこれらの衛星都市で試されている。面白いのは、衛星都市ひとつひとつが違う顔をしていることだ。なぜかと言うと、道路や街区設計、土地利用や用途規制など、都市計画の様々なアイデアがいろいろと試されているからなのだ。だから、基盤整備はとてもよく出来ていて、都市としての発展のポテンシャルがある。残念なのは、ブラジルが経済的には豊かではないので、建っている建物がやや粗末であることから、日本人にはスラムに見えてしまうことだ。それはとんでもない誤解であり、スラムではなく立派なインフラが整備されていた計画的な都市なのである。(写真4)

ブラジリアというと通常は連邦区（ディストリット・フェデラル）をさすが、それは衛星都市群を含む大きなエリアであり、コンペで選ばれたのは飛行機型で有名なプレーノ・ピロットと呼ばれる小さな地区にすぎない。これはいわゆる首都機能の中核部であって、いわば霞ヶ関にあたる。今日連邦区は人口



写真1 沿岸都市とブラジリアの距離

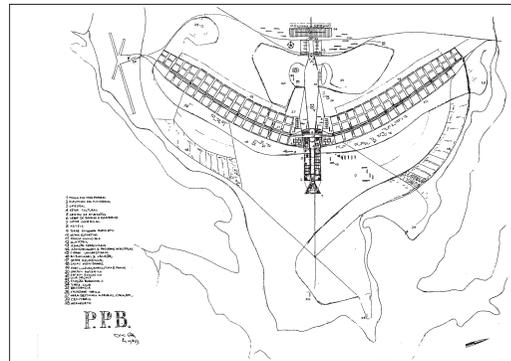


写真2 コンペ案（マスタープラン）

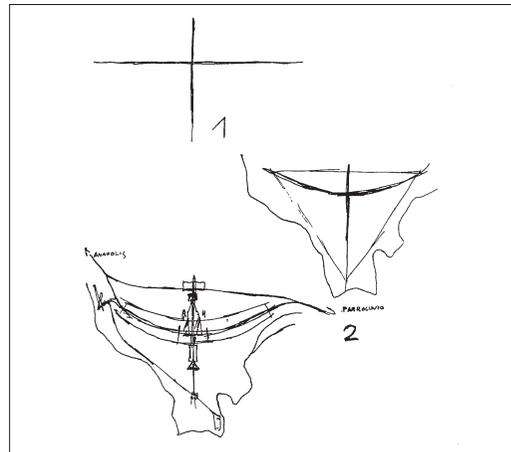


写真3 コンペ案（二本の線）

300万を超えており、巨大経済圏になってしまった。にもかかわらず、連邦区では土地利用が計画的に誘導されていて、都市計画が破綻している東京とは好対照といえる。地図に明らかなように、街の仕組みが目で見えてわかりやすく表現されていることから、非常に斬新な都市といえる。交通体系も人間の解剖図のように秩序立っていて、生物学的なシステムであり、本当に理想的な都市設計案なのだ。(写真5)

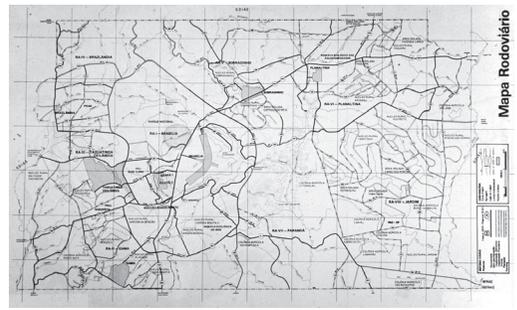


写真4 衛星都市群と連邦区

オスカー・ニーマイヤーとルシオ・コスタ

このように作られたブラジリアの建築では、ニーマイヤーばかりが目立って知られているが、ニーマイヤーの先生がルシオ・コスタであり、リオデジャネイロの芸術学校の学長だった人である。コンペでは子弟が逆転し、審査員が生徒のニーマイヤーでエントリーしたのが先生のルシオ・コスタであった。ブラジリアのマスタープランはルシオ・コスタの案なのだが、そこに建てられている建物は、ほぼすべてニーマイヤーの設計作品である。

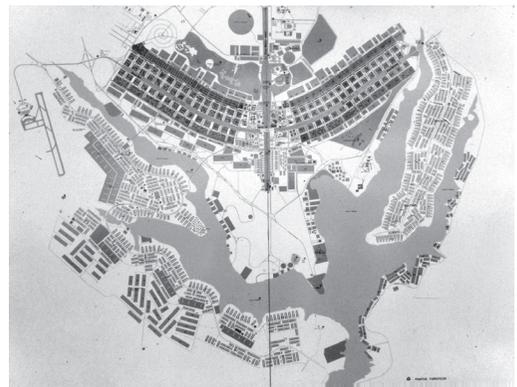


写真5 プラーノ・ピロット

今日でもいまだにニーマイヤーがブラジリアの建物を設計し続けているのだが、それは若干問題であると思っている。多様で魅力的な都市を良しとする今日的な考えからすれば、一人の建築家がすべての建物をデザインすることなどあり得ないという意味で。(写真6 写真7)



写真6 オスカー・ニーマイヤー

ニーマイヤー建築の数々

ニーマイヤー芸術の優れた造形美がブラジリアの多くの建築に見られる。国会議事堂もそのひとつである。おそらく日本の方は誤解していると思うのだが、あの有名な上下のお椀型は単に装飾である。ニーマイヤーの建築のひとつの典型なのだが、本体は見えない地

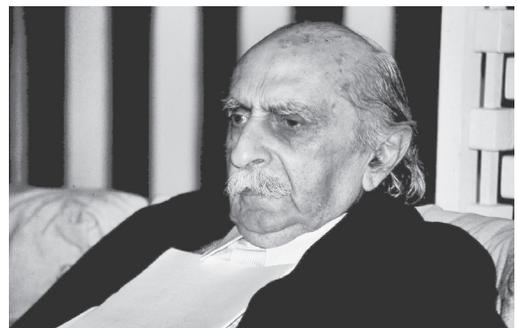


写真7 ルシオ・コスタ

下にあって、飾りがこのように自由造形されている。これら二つのお椀型は上院下院の上におかれている屋根飾りであり、議事堂そのものは地下にあるのだ。(写真8)

多くの建物がこの方式で設計されているが、実はこれがすごく優れていて、サステイナブル建築でもある。なぜならブラジリアの気候は寒暖の差が激しく、また乾季雨季も過酷であるからである。涼しい室内気候が安定して得られる地下室を積極的に使う手法なのである。それにより空調に頼らない建物が可能なわけで、形だけ見ると奇抜だが、気候風土に順応した考え抜かれた建物なのである。

そんな中で、カテドラルはニーマイヤー建築の典型的な作品である。見えているあの奇抜な形は屋根にすぎず、床はスロープの先の地下にある。ここにも空調はなく、屋根は全部ガラス張りなのに、エアコンなしでミサができてしまうわけだから、これはすごいアイデアと言わざるを得ない。外周は全部水盤になっていて、気化熱が冷気をつくり、自然換気でその冷気が天井を昇っていくという作りになっている。ガラス屋根の同じ手法が国立劇場のホワイエの屋根にも使われている。(写真9)

生活都市ブラジリア

ブラジリアの首都機能部分とは異なり、生活都市ブラジリアの評判はよろしくない。モニュメンタルでシンボリックなのは評価されても、あんなところに住めるかという評価である。でも私は、こんなすばらしい住みやすい街は無いと評価している。日本人に住みやすいかと言うとそれはわからないが、ブラジル人にとって住みやすいか考えた時、私の10年ブラジルに住んだ体験からすれば、非常に住みやすい街だとわかる。



写真8 国会議事堂



写真9 カテドラル

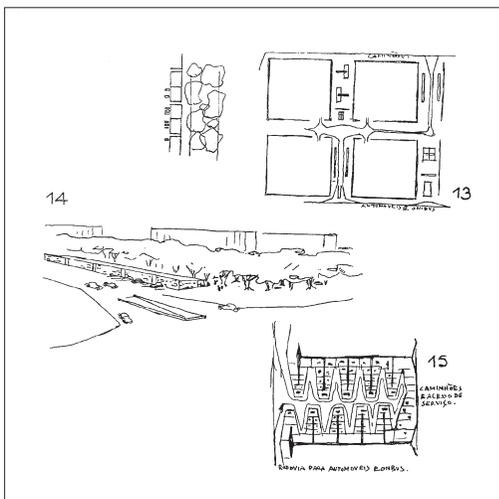


写真10 コンペ案 (近隣住区)

その秘密はコンペの時のルシオ・コスタのスケッチに示されている。ヴィジナンサと訳されている近隣住区というヨーロッパの考えが採用されており、緻密に考えられた住生活空間が実現している。(写真10)

車社会への対応も当時の最先端をいっており現在にも通用する人間重視の考え方が施されている。完全に車を優先する世界と、逆に完全に人間を優先する世界とが組み合わせられた都市構造は、まさにル・コルビジェの理論なのだが、日本では車ばかりというところしか報道されないから誤認されている。日本の評論家でこういうところまで見る人はいないでバッシングが横行している。私は友達もいっぱいおり、友人宅に実際に泊まったりして体験できたので、なるほどと感心することになるのだ。

砂漠のように埃だらけであんな街に住めるかと、出来て間もなく行った人は言ったわけだが、今日のこの街を見たら驚くはずである。今行ってみれば何百万という植樹のすごさが圧倒的で、森のように埋め尽くされている。砂漠の中のオアシスであって、本当に大木がうっそうとしており、住宅地の緑の多さは南米一といわれているほどである。(写真 11)

ブラジリアの意義

最後に私にとってブラジリアの意義を以下に述べて本稿を終えたい。

第一に、純化した首都機能がもたらす都市の効率と言う意味で、ブラジリアは良い例を示してくれているという意義である。例えば、日本にアメリカの大統領をお迎えするとしたら何がおきるだろうか。成田飛行場に着く、あるいは羽田に着いたとしよう。すべての交通をストップして、厳戒態勢の元に1時間かかかって機動隊が誘導することだろう。東京が首都であるより都民の経済都市であるが故の宿命である。ブラジリアでは、飛行場へつけばノンストップで大統領官邸や国会議事堂まで10分で到着する。何の為に作った街かということを忘れて、自分が住む街として評価するから、日本人はいろいろ言いたく



写真 11 緑溢れる住宅地

なるだろうが、それは意味がない。ブラジリアは何にもまして首都だということ、首都というのはこうあるべきだということ、首都は司法・行政・立法の三権と国防の拠点だということ、そういう意味でブラジリアを語る時、首都がうまく機能しているというところを評価してあげないとかわいそうであることを申し上げたい。

第二に都市計画上の意義についてである。コルビジェは既に過去の人だが、しかし、日本のすべての都市の理論も、世界中の理論も元を正せば、コルビジェの近代都市計画理論がベースになっているという事実がある。ブラジリアには宗教施設の配置の問題や商店街構成の問題などいくつかの問題があるのも事実だが、でもだから作らなければ良かったではなく、それが分かったのだから直せばいいだけの話だということを上げたい。ブラジリアの人達は自分で良い街だと思っているが、良くない部分があることも理解している。それを、今2世、3世たちが修正している。そういう意味で、都市計画史上の生きた標本が実在するというのはすごいことであり、私は価値ある物としてブラジリアを評価している。

第三に、中南米の街の実態、経済とか治安とか教育とか、あるいはスラムとか、そういった問題があるのが中南米なのであり、そこに

ブラジリアが特異な存在としてあるという認識の問題をあげたい。中南米のこれからの都市モデルを考える上で、大切な見方なのではないかと思うからである。

第四に、建築・都市とそれらが市民にどう捉えられているかという一体感の問題をあげたい。日本ではおよそそれを感じない。建物の評価なんて誰もしていない。不動産の価値以外はほとんど意味をもたない。作っては壊し、作っては壊し、出来た建物がどんなに醜悪でも色彩氾濫でも、洗濯物だらけでごちゃごちゃでも平気。そのような街の風情はスラムなら仕方ないが、普通の街としてブラジル人にとっては考えられないことなのだ。そういう一体感がブラジリアからは感じられる。あまたの芸術的建築群に囲まれて生活する人々の基礎素養、感性の高さがそこにはある。

そして最後に、ブラジリア人にとっての誇りの問題を指摘したい。これを日本人は完全に失っている。日本でも世界文化遺産にいくつかエントリーしているが、ブラジリアはその昔に世界文化遺産に登録された。世界で一番若い世界文化遺産といわれている。指定されるとすぐにお祝いとして、ルシオ・コスタ・スペースが三権広場の地下に作られた。プラノ・ピロットの巨大な模型が置かれている。(写真12) この模型に原設計を刻印し、永久にこの形を変えない。保存し続ける。そういうブラジル人の意思表示なのだ。作ってすぐ壊す日本とはえらい違いである。50年しか経っていない建物を文化遺産にして、金輪際変えないと言うのも、ブラジル人にとっての自負というか、プライドというか、すごいなと思う。ルシオ・コスタは96歳でなくなった。オスカー・ニーマイヤーはいまなお健在で、102歳になった。100歳の時に何度目かの入籍をし、今でも現役として設計



写真12 エスピット・ルシオ・コスタの模型



写真13 クビチェックメモリアル

デザインをしているという。

クビチェック大統領はサンパウロ郊外で壮絶な自動車事故で即死したが、その後にオスカー・ニーマイヤーの設計でクビチェックメモリアルが作られた。ブラジリア都市軸上の高い丘のところに建っている。クビチェックが空高く手を挙げています。本年50周年を迎えたことを彼が今どう思っているか知るすべもない。(写真13)

(なんじょう・ひろお 株式会社南條設計室所長)